

94. Dressを着る建築。 ～敷地境界の操作から生まれる新たな町並み～

05168006 石井 健太
指導教員 市川 尚紀 講師

ファッション 庭 郊外 敷地境界線 個性

1. はじめに

建築とファッションについて考える。ファッションにおける自由さを建築に取り入れる事で、建築はもっと楽しくならないだろうか。では、建築における「着る」とは、一体どういう事なのか。

日本の伝統的な民家は庭を持つ事が多い。私はこの行為を「着る」と捉える。一度建てた家に対して変更を行う事は出来ない家に対し、庭は季節に応じて植物を植え替えたり、庭園を作ったり、自由に変化させる事が可能である。また、それらは個人と公共の境にある為、人々に自分を表す場ともなる。「間」として言われる庭だが、私なりの解釈として人は自分を表現する場として庭を持つと言う事に意味を見つけているのではないかと考える。また住居の外部空間となる庭を操作する事は固定された内部空間に変化を生むものと考ええる。

本計画では、そんな庭に「服を着るような操作」を加える事で個人、町全体を豊にする事を考える。

都市の郊外は、これまでの存在した自然の場所を平坦にし、区画を入れあて、等間隔に建ち並べ増殖させていく方法で人々が住まおうとする結果、都市の拡大と自然破壊が進行しつつあり、住民のコミュニティ作りも最小限にとどまっているように思える。

このような現状に対して、「着る」という行為を通し、即存の自然を尊重しながら、土地に個人空間と公共空間を織り込んでいく方法を取る事を考える。住人の個性を表すように、それぞれ思い思いの形態で、地域の人との共有感覚を大切にしながら、服を着る感覚で、各住居の敷地境界を操作しながら庭を着ていく。からみ合う境界は、その町の住人の共有から生まれた路地のようなパブリックスペースを生む。このように町並みは、場所、住人、時間により生み出され、二つとして同じ住居群は生まれないと考える。

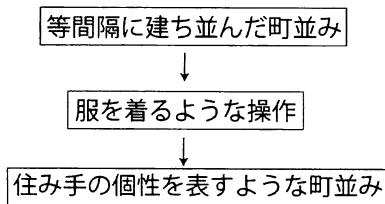


図 1 コンセプトダイアグラム

2. 計画地概要

広島市の郊外に位置する五日市は、都心へ通勤する者の住宅を中心に発達し、大都市周辺の郊外化した衛星都市である。ひな壇造成の分譲住宅地や、多様な自然と応答する事ない商品化住宅が建ち並んでいる。そのような住宅地は、都市の姿とさほど変わらない。本来、郊外に住む目的は、自然の中で暮らし、都市にはない生活、コミュニティを求める為ではなかったのか。

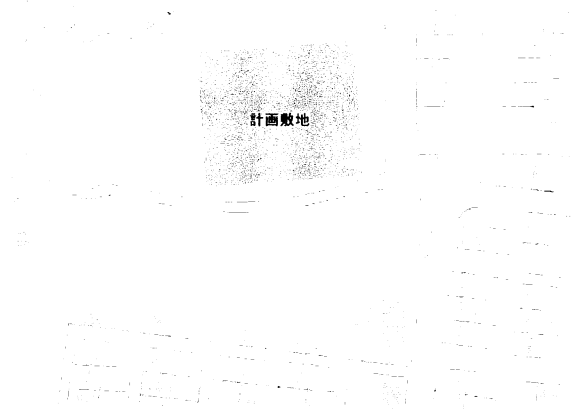


図 2 計画敷地



図 3 計画地周辺空中写真

3. 計画内容

3.1 敷地境界の再定義

区画され、面積で与えられる敷地境界を、それを囲む線の長さにより敷地を与えるシステムを考える。25戸の家の入る敷地内で各住居は、敷地境界を自由に選択操作する事が可能になる。本計画では、13×13mの正方形を基本区画と考え、四辺の長さを足し合わせたL=52mを敷地境界に与える長さとする。

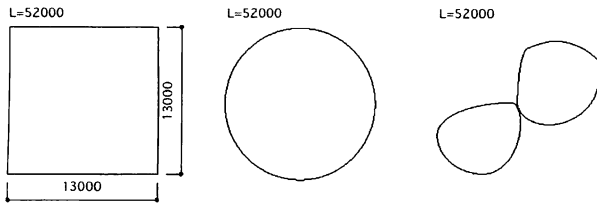


図4 境界を表すダイアグラム

3.2 住居の配置

各住居は即存の地形の形、傾斜に沿わせ、配置する。各住居の距離は、基本形である四角形に敷地境界を取った場合に重なり合わない距離をとる。

この区画には決まった道は存在しない為、決まった場所に玄関扉が存在しない。つまりこの家には裏と表が無い事になる。25戸すべての一階部分はピロティとなる。各住居はピロティを通し視線の通り抜ける空間となり、住民の共有意識を高める切っ掛けになる事を期待する。

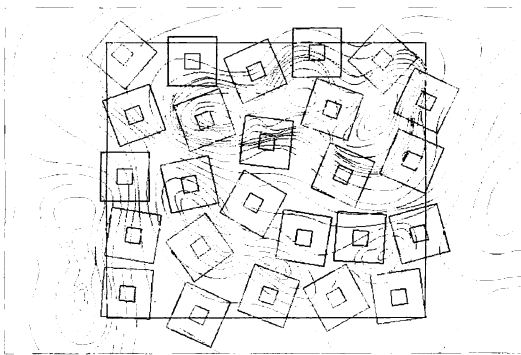


図5 住居の配置

3.3 新たな町並み

隣り合う住居の境界と境界の間は動線となり時に空間ともなる。境界と境界の間は、住人にとってのパブリックスペースとなり、個人と個人の間には、町に対する共有意識が生まれ、個人と個人の境界を和らげる。それはお隣さんとの関係を、地域住人との関係を大切にしてきた日本人の生活風景の基盤でもある。

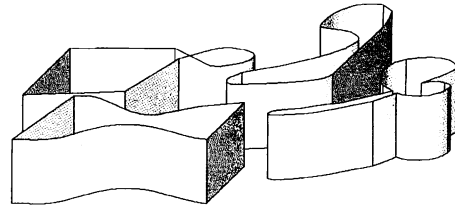


図6 隣人との関係を生む境界

3.4 プライベートとパブリック

それぞれの生活が外ににじみ出す町並みは、パブリックとプライベートの境界をあいまいにし、パブリックがプライベートとして感じる町並みになる。公と私の曖昧さ、それは、町全体を自分の居場所と感じ、住む人みんなの大きな家族のような、町への愛着に繋がる。普段は家の中にあるリビングが、誰かの庭の横にあったり、普段小さな花畑が誰かの花畑と一緒にになり、さらに快適な空間となったりする。それらの空間は、時によって変化するため、いつも異なる関係性が生れる多様な顔を持つ町並みが作られる。

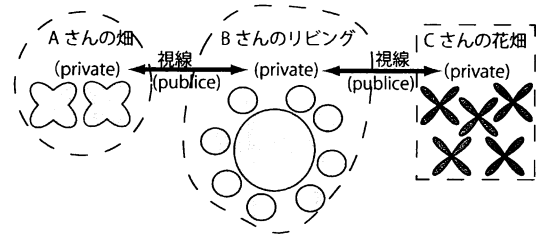


図7 プライベートとパブリックの関係

4. 総括

本計画は広島市の郊外に位置する、五月が丘を計画対象敷地とし、自然と応答する事無く、均一化していく町並みに対して、住居の配置と庭を囲む敷地境界の操作によって、その土地にしかない町並みとコミュニティを形成する事を計画する。服を着る様に自由に操作可能な境界は、住居に対して様々な庭を作ると共に、住居間同士に多様な空間を生みだしコミュニティを発現させる。季節、年月によって変化していく環境に対し、敷地境界も変化し、それらが作り出す空間も共にも変えていく。

その場所にある、場所、時間、人が関わり合い、いつも異なる関係性から生まれる空間より、いつの時代もいきいきとした町並が作り出される事を期待する。

建築概要

所在地：広島県五日市五月が丘 主要用途：郊外住宅地
構造：RC造・布 規模：6205㎡